

若者が楽しむ Club-Dance に関する一考察

内山明子

〔緒言〕

本研究は、大阪・京都で流行している若者たちの「YOGORE」と呼ばれる踊りの現象を通して、今の若者たちがどのような身体感覚の中で生き、現在という社会との関わりの中で何を求めているのか、またどのような問題を孕んでいるのかを読み解くための一考察である。

〔研究方法〕

①「YOGORE」をビデオ撮影し、その後歌詞と動きの関係性を分析した。 1998年7月23日

②大阪アメリカ村のクラブ・イノセントにて、どのように踊られているのかを実際に体験し、一部ビデオ撮影した。1998年10月31日大阪心斎橋にて

〔結果と考察〕

「YOGORE」の言葉の意味を探るため会場でインタビューをしたが、「ただ皆が呼んでいるから」という返事だけでつきとめられなかった。しかし、発生過程は数年前の東京の「Para Para」（ユーロビート系や小室系の曲を使用）が伝わり、特に関西で「YOGORE」（レゲエ、ヒップ・ホップ、ロックなど広範囲のジャンルの曲を使用）として流行しているようである。

次に伴奏音としている曲の1例を挙げてみよう。

TELL THE WORLD by Pandora (パンドラ)

Gonna tell the world
テル 輪 7

I'm doin' alright
Ifのオーライ or Ifの裏

Without you baby
ガッツ ベイビー


Gonna tell the world
I'm 'ceelin' so fine oh-yeah
強弱(強弱) 5 ビース

I'm doin' alright
I'm doin' alright

Stronger now without you
ビート(ビート) パーキョン

I'm doin' alright
I'm doin' alright

Can't you let it go
拍手 (拍手)



●若者たちの「当て振り」について

音楽の歌詞を物真似によって説明する最も単純な振りの手法が「当て振り」であるが、現在の若者の当て振りは意味のつながりや感情の流れを無視して“音”の聞こえるままに振り付けをし、動き（しぐさ）のコラージュを楽しんでいる。従来の「当て振り」という古い感覚と動きのコラージュという新しい感覚の錯乱（対立・入れ子）といったハイブリットなイメージを意識の中で遊んでいるように思われる。また、瞬間的・直観的当て振

り遊びによって、身体感覚のウェーブを楽しみ、彼ら特有の快感を作り出している。

●若者たちの時間感覚と存在の感覚

若者たちの「当て振り」は、一つの音も聞き落とすまいとしているかのようにスピーディである。“すること”の連続で時間を埋めつくさなければ虚しいと感じてしまう心性が支配的であり、その結果若者たちの時間感覚がおそろしくせつかちになってきているのは確かだ。“何かであることとは関係ない—ただあること・ただ存在すること”すなわち自己の存在への感覚が希薄になってきていることの現象とは考えられないだろうか。

●自閉する身体

1960年代後半から80年代前半にかけて時代の主流であった人間の有機的的身体性を剥き出しにしたパフォーマンスは、80年代後半から無機的な電子の壁であるインスタレーション（装置）の時代へ移行しており、21世紀になると時代の気分はどのような展開を見せるのだろうか。

浦¹⁾が言うように「ヒトとキカイの境界が消える近未来感覚においては、身体的・物理的な移動やパフォーマンスは必要としない。ポストモダンでは、自閉こそ心地よく、ソフィスティケートドでインテリジェントである。「書を捨てて町へ出よう」から再び書やコンピューターの世界に自閉・個立（孤立ではない）しながら、心は電子の森の中で自在に遊ぶ時代になった」ことから、当て振りを楽しむ若者は見る・見られるという外にアピールする身体よりもゲームに必死になる内にこもる身体を有しているようである。内を揺さぶるための手段を探しているかのような踊りに自閉しながら、かろうじて「YOGORE」という踊りの中に存在することで他者とのコミュニケーションを図っているのかもしれない。

●エクレクティクな感覚

若者の当て振りから感性の在りかたのひとつとして、エクレクティシズム（折衷主義）が伺える。異質なものをどんどん取り込み、融合など面倒なことをせず、ただ脈絡なく共存させてしまう感覚である。ただ自分たちがいちばんおもしろく、気持ち良くなれる動きをやっているだけで、だからこそ、その空間においては生き生きしているのだ。

〔まとめ〕

若者の「YOGORE」の当て振りダンスは、出口のない暗闇の中でもがいているようにも見えるし、エクレクティクな感覚で新しい地平にポンとスキップしているようにも感じられた。おそらく、時代の気分とともに大変スピーディに変化をしていくと思われる。現象の多様性の中で感覚の生成する場としてのダンスを見守っていきたい。

注1) 浦達也：感覚の近未来、新曜社、27、1986